

令和三年一月

地に堕ちたサウジ外交パート2: 失速した陰の主役ムハンマド皇太子

昨年、サウジアラビアがホスト役を務める二つの重要な国際会議があった。一つは主要国の首脳が一堂に会し世界が直面する問題を幅広く議論するG20サミットであり、もう一つは世界のエネルギー市場に大きなインパクトを与えるOPEC(石油輸出国機構)と非OPEC石油輸出国、いわゆるOPEC+プラスの合同閣僚会議である。

G20サミットはサルマン国王がホスト役を、またOPEC+閣僚会議はアブドルアジズ石油相がロシアのノバク・エネルギー相(2020年9月に副首相に昇格)と共同議長を務めた。アブドルアジズ石油相はサルマン国王の子息である。サウジアラビアには国王と石油相の他にもう一人重要人物がいる。ムハンマド皇太子である。皇太子はサルマン国王の息子であり、石油相の異母弟という関係であり、Mbsと略称されている。

サルマン国王の数多い息子たちの中で国王の寵愛を受けたMbsは兄たちを押しつけて2017年に皇太子に即位、絶大な権力を掌握して国内外からサウジアラビアの実質的な統治者と見なされてきた。そのため今回のG20或いはOPEC+の両会議でも舞台裏で大きな役割を果たすと考えられた。病弱な父王、或いは決断力に欠けるとされる異母兄に代わり、場合によっては表舞台で采配を振るうのでは、とすら見る向きもあったほどである。

しかしメディアの報道を見る限りでは両会議におけるMbsの存在感は薄かった。と同時に両会議を通じて国際舞台におけるサウジアラビアの存在感そのものが極めて希薄であることが証明されたと言えよう。

1. G20: 誰も期待しなかったサウジアラビアの外交力

2020年十一月二十一、二、サウジアラビアの首都リヤドでG20サミットが開催された。世界的な新型コロナウイルス蔓延(COVID19)のため、各国首脳が直接顔を合わせることはなく、テレビ会議方式で意見が交わされた。前年2019年の大阪サミットには皇太子(Mbs)が出席し、安倍首相(当時)からバトンタッチを受けている。皇太子はその後、東京で即位早々の令和天皇に会見¹、意気揚々と帰国したのであった。2019年末まで事前準備は順調に進んだが、COVID19のため年明け後、事態が急変、3月にはサミットをテレビ会議方式で行うことが決定されている²。



TV会議方式は参加各国首脳の時調整がしやすくコロナウイルス感染を防止できるなど利点がある反面、いくつかの問題も抱えている。各国首脳がテレビ画面に顔を並べるものの、発言は議長(サルマン国王)の指示に従い各国首脳が順番に発言するため、横合いから議論をさしはさむことができない。つまり円卓会議のように自由闊達な討論ができないことである。テレビ会議でその穴埋めをするのは議長の力量にかかってくる。また最終コミニケを作成するうえで議場外での個別会談は不可欠である。

結局リヤド・サミットでは各国首脳がコロナ対策の一般論と外交・経済面の自国の立場を主張するだけであった。そしてコミニケ作成に一役買うはずであったMbsの出番も全くなかった。結局コミニケ採択もないうままG20は閉会した。

COVID-19と言う予期せざる障害のためテレビ会議方式となったことはサウジアラビアにとって不幸なことだった。しかしそのような中でこそあえてCOVID-19に対する国際協調と共同行動を呼びかけ、また債務に苦しむ貧しい国に手を差し伸べる提言は可能だったと思われる。それができなかったのはサルマン国王のリーダーシップが不足していたと言えよう。さらに付言するならば、陰の主役たるべき皇太子(Mbs)がその力量を示す機会が全くなかったことも触れておきたい。Mbsはカシヨギ暗殺事件以来、国際的評価は地に墮ちており、特に欧米先進国からは極端に嫌われている。国際外交の舞台に立つことなど問題外だったのである。

誰も期待しなかったサウジアラビアの外交力。サウジアラビアはサルマン国王とムハンマド皇太子の晴れ姿を見せる絶好の機会を逸したのである。

2. OPEC+閣僚会合：サウジとロシアの齟齬はMbsとプーチン大統領間のホットライン途絶に一因

2020年初めの北海ブレント原油価格は64ドル/バレルで産油国が満足すべき状態であった。しかしコロナウイルス(COVID-19)問題が世界経済を直撃し石油需要の見通しは不透明であった。非OPEC最大の産油国ロシアは協調減産の緩和を求め増産に走った。これに対してOPECの盟主サウジアラビアは需要減退を懸念して減産の強化を主張したが両者は折り合わず、結局サウジも増産に走り、市場はチキンレースの様相を呈した。

この結果、四月のブレント原油価格は18ドル/バレルに急落した。WTI原油の翌月物は引き取り手がなく売り手が損を覚悟で決済を余儀なく



され、価格は一時マイナスになると言う異常事態が発生した。四月十二日、COVID19のためテレビ会議方式で開催されたOPEC・非OPEC臨時閣僚会合(ONOMM)で両者は協調減産を継続することで合意した。減産量は五月六月70万B/D、七月十二月770万B/D、2021年一月-22年四月まで550万B/Dとされた。これにより年末のブレント価格は50ドルまで回復した。

それでもサウジアラビア以外の大半のOPEC及び非OPEC産油国は歳入不足に苦しみ、2021年以降の減産緩和を求めた。その急先鋒がロシアであり、同国は再びサウジアラビアと対立したのである。十二月、一月と続けて開かれたテレビ会議方式によるOPEC+閣僚会合(ONOMM)では、減産幅を十二月以降770万B/Dから720万B/Dに緩和し、各国ごとの生産レベルを示し、ONOMM会合を毎月開催し減産幅を協議することとした。

テレビ会議方式の導入がOPEC+の意思決定に大きな変化をもたらしたことは間違いない。ONOMMが毎月開催されることによりOPEC+の意思疎通が密接になるメリットは大きい。その反面、会議場外での事前根回し、あるいはフィクサー(黒幕の重要人物)による調停など会議の成否を左右する要素が働きにくくなった。ONOMMの共同議長を務めるサウジアラビアのアブドルアジズ石油相とロシアのノバク副首相兼石油相は従来会議前日にウィーンに入り、二者会談を行って議案の調整を行い、サウジはOPEC諸国を、ロシアは非OPEC諸国を説得して本会議をスムーズに運営してきた。さらに増産・減産の方針決定など国家のトップによる決着が必要な問題については、サウジアラビアのムハンマド皇太子(Mbs)がフィクサーとなってロシアのプーチン大統領とのホットラインで決定してきた経緯がある。Mbsは皇太子即位以降、折に触れてプーチンと直接あるいは電話会談を重ね信頼関係を築きあげている。

このような個人の信頼関係で物事を進めるのは強権国家の支配者に特有のことである。Mbsの相手のプーチン大統領や米国のトランプ前大統領も同様であったと言える。しかしこれは裏を返せば信頼関係が揺らげばホットラインが機能しなくなることを意味している。最近のメディアの報道を見る限り、Mbsとプーチン大統領がホットラインでつながっているようには見えない。プーチン大統領がMbsを遠ざけていると思われる。その理由はカシゴギ暗殺事件によりMbsの国際的な評価が落ちていることに加え、ロシアにとって中東外交あるいは資源外交におけるサウジアラビアの利用価値が無くなったためと言えそうである。

OPECの政策決定でMbsの出番は無くなったようである。OPEC+問題に限らず、G20あるいはGCCサミットにおいても昨今のMbsの存在感は薄い。これまで独断専行が目立つMbsであったが、最近ではサルマン国王との間にすきま風が吹いているのではないかと疑われるほどである。

本件に関するコメント¹の意見をお聞かせください。
荒葉一也

Arehakazuya1@gmail.com

¹ Coronavirus crisis dominates Saudi-hosted G20 summit
2011/11/21 Kuwait Times

<https://news.kuwaittimes.net/website/coronavirus-crisis-dominates-saudi-hosted-g20-summit/>

² Saudi Crown Prince Mohammed bin Salman meets with Japanese emperor in Tokyo
2019/7/2 Arab News

<http://www.arabnews.com/node/1519326/saudi-arabia>

³ Saudi Arabia to convene virtual G20 summit on coronavirus
2020/3/18 Arab News

<https://www.arabnews.com/node/1642871/saudi-arabia>

⁴ Saudi Arabia hands over G20 presidency to Italy as Riyadh summit concludes
2020/11/22 Arab News

<https://www.arabnews.com/node/1766871/saudi-arabia>

⁵ G20 dithers on poor countries debt time-bomb amid crisis warning
2020/11/23 Kuwait Times

<https://news.kuwaittimes.net/website/G20-dithers-on-poor-countries-debt-time-bomb-amid-crisis-warning/>

⁶ グラフ「米・露・サウジの原油生産量とBrent原油価格の推移」参照。

⁷ レポート「首の皮一枚でつながったOPEC+(プラス)体制」参照。

⁸ レポート「地に落ちたサウジ外交 Part1: 無条件和解したGCCサミット」参照。